

私の目をみて！

駅から、バスにゆられていくと、やがて、たんぼのなかに、美しい工場の棟のたちならんでるのが、目のなかいっぱいにとびこんできました。

〈あすこで、今日から、勝子の新しい生活がはじまるのや！あの工場の門のなかに、なにが勝子をまっているのか……〉生れてはじめて、あの川のある部落からはなれ、父母のところから巣立ってきた一羽の小鳥のような勝子は、期待に胸をふくらませています。しかし、そのふくらんだ胸のなかにも、かすな不安がよぎるのです。そこには、おそらく差別がまっているだろうからです。

こんどはクラスのなかまはいないし、勝子はひとりぼっちです。

今朝、家をでるとき、母は、着がえなどをいれたポストンバックをもって、市電の停留所まで送りにきてくれたけれど、父は、だまったままでしきいをまたぐ勝子の顔を見つめていたのです。あのときのあの父の顔が、勝子の目にうかんできます。市電に勝子がのりこむとき、ポストンバックを手わたしてくれながら、

「勝子。気嫌よろしく、みんなにかわいがってもらおうのやで……」

とってくれた、あのときのあの母のかすれ声が、耳によみがえってきます。

勝子は、そのとき、鼻の奥がツンとなって泣けそうになったのです。勝子はそれをこらえ、心のなかで、（かあちゃん、おおきに。勝子はがんばるでエ……つよく生きぬくでエ！）と誓っていたのでした。

勝子といっしょに、この日、この織物工場の門をくぐった中卒生たちは、50人近くもいました。

「新しく入社したみなさんに、全工場あげて期待しています」という、工場長さんの訓話をきいたあと、勝子たちは、寮に案内されました。寮は、廊下をまんなかにして、両側にアパートのように部屋が並んでいる2階建ての木造でした。一つの部屋に6人です。新入社員のもものが、一人づつはいることになったのです。寮母さんから、「今度入社された勝子さんです。みなさん仲よくしてあげてくださいね」と紹介されて、勝子のはいった部屋には、もう30ぐらいの人が一人いて、あとの4人は、勝子より2つ3つ年かさの人たちでした。

部屋の人たちは、みな親切でした。押入のあいたところを、使うようにといってくれます。そこには、会社から貸与される布団も一組入っていました。

「わからないことや、困ったことがあれば、いつでもいって下さいね。こうして一つ部屋でくらすことになったのですから、お互い助けあっていきましょうね。」

いちばん年かさの春江さんがいってくれます。一人一人、名前と出身地を自己紹介してくれました。春江さんは島根で、あとの人たちは、鳥取と香川の人が2人ずつでした。

「勝子さんは関西ですって……」

「はい。関西ゆうてもひろいでしょう。X市なんです」

「わあ、X市って観光地で有名なところやろ。私、修学旅行にいっただけ。X市のどのへん」

陽子という香川の人が、はしゃいでたずねました。

「名所の多い……そんな街のなかとちがうの……もうはずれの……つまらんところですよ」

どうして私は、あの川のある部落の地名をいわないのだろう。みんな遠くはなれた県の人たちだもの、わかるわけがないに……。山嵐先生おこるやろな。学校では、あれだけえらそうにいつてきた私が、こうして、つい部落のことをかくそうとしてるんだもの。勝子、平気でいえばいいじゃないの……。という勝子自身の声が、勝子をしっかりとつけている……。

しかし勝子はついにそのことをいいたせなかつたのです。

やがて、1ヶ月の養成期間が終わりました。養成期間の間は、機械のつかい方の講義や、実習などがありました。はじめて工場へは行って、勝子はびっくりしてしまいました。養成係の男の工員さんから説明されても、なにをいつているのか、ぜんぜん聞えないのです。糸を巻いたコマがくるくるまわり、機械がカチャンカチャンとあがりさがりするにつれて、真白な布地がのびていくのです。

“さあ、私も、仕事らしい仕事ができるぞ！” 勝子の胸には闘志がわいてきました。

作業もだいぶ覚えられて、職場の人とも仲よしくなってきた、ある日曜日のことでした。勝子が洗面所へいくと、いっしょに入社した隣の部屋の愛子さんがタオルで顔をぬぐっていました。

「おはよう」をいいかわしたあと、彼女は声をひそめて、

「勝子ちゃん。この会社に部落の人、たくさんいてんのやって……」

と話しかけてきました。勝子の、いきおいよくうごいていたハブラシの手がびたりととまってしまいました。とうとうきたのだ。私が、人間として値打のあるものであるかどうか、ためされるときがきたのだ……。つめたいものが背すじを流れていきます。

「なに？ 部落って……」

勝子は、いっしょうけんめい、たかぶってくる感情をおさえながらいいました。

「勝子ちゃん、知らんの」

「うん」

「平民の下のものやがな」

「ふうん。まだ平民ってあったのか……」

「よういうでしょう。部落って……まさか、あんたじゃないやろね」

勝子は、なんとかして笑顔をつくろうとしますが、どうしても顔がこわばってくるのです。

「……」

「まさか、あんた……」

「もし……、もし、私がそうやったら、どうするの」

勝子は決心しました。かくすことはないのです。恥ずかしがることはないのです。

「そんなことないでしょう」

「そうやったらどうするの」

勝子の声は荒くなってきます。感情のたかぶりをおさえようとしても、おさえきれないのです。「そんなことない。そんなことないわ……。でも、もしそうだとしたら、ただの友人なら、なんともないけど……。それ以上はかなんわ」

「それ以上ってなんのこと」

「たとえば異性の人やったら考えなおすわ」

「どうして？」

「どうしてって、こわいもの……」

「どうして、こわいの……」

「みんなが、そういっているもの……」

「それは、愛子ちゃんの先入観とちがうか……。 (いうのだ、はっきりいうのだ) それ証拠に、この私がこわい」

「……」

愛子の顔色が、かわってしまいました。とたんに真剣な表情になったのです。

「いままで、私とつきあって、こわいと思ったことあった」

「ううん……」

「部落というのはね、徳川時代にあった、あの士農工商という身分制度なのよ。この4つの身分よりまだ下とされてたのよ。幕府が、百姓町人を、牛のように働かせるために、上みてくらすな下みてくらせ、部落のことと思ったら、おまえらはまだだといって、支配しやすいように、こさえたものよ。その人たちの子孫をいまだに差別しているのよ。それはまちがっているのよ」

勝子は、だんだんおちついてきて、中学校でならったことをしゃべりつづけました。

「でも勝子ちゃん、今の時代にはもう差別はないでしょう」

愛子は、うつむきながらいいました。

「あなた、いま異性なら考えなおすっていったじゃないの。それが差別の証拠よ」

「けど……あなたが、そんなとこの人って信じられないわ」

「じゃ、私の目をみて」

勝子の目には涙がたまってきました。泣いてはいけない、そう思い、こらえようとするのですが、涙はあふれて、頬をつたっておちました。愛子は、ちらと勝子の眼をみあげましたが、すぐ目をふせてしまいました。

「私、あなたにいいたいの、あなたは部落のことをなんにも知らずに、差別してるんだわ。私、いままでも、別にかくしてたんじゃないのよ。いいだすチャンスがなかっただけ……。私、きつと、あなたにわかたてもらうわ。根くらべしてでも、わかたてもらうわ。あなたが、まちがっているってこと……。今日はこれだけにしとく、ハイキングにおくれるから……。さあ、愛子ちゃんもいそがなくっちゃ」

そうはいったものの、こんな工場のなかで、どうたたかっていけばいいのか、勝子にはわかりませんでした。

部屋へ遊びにやってきた、2階にいる雅子さんが、陽子さんたちとしゃべっていましたが、「MさんとYさんが、そうやって……」などと情報を告げて、わいわいといたりします。それを聞くにつけても、もうじっとしておれません。1700人の従業員全体に対してどうたたかったらいいのでしょうか。

(土方 鉄著「被差別部落のたたかい」新泉社より)

1990年度第2学年第4回全体学習・翌日の授業の記録と感想(板野中学校2年B組)

主 題 「真実に生きる」

1990年12月14日(金)

資 料 「私の目をみて！」(土方 鉄)

授業者 森 口 健 司

T 1: 昨日、D組の公開授業の後、2年生全体で『私の目をみて!』についてのいろいろな意見や、部落問題学習についてのいろいろな考えを発表してもらったんですけど、私は今もあのとときの感動で胸がいっぱいです。授業が終わった後、授業の最後に涙をこぼしてしまったKさんを取り囲んで何人かの女子が、それぞれの思いを語り合っている姿を私はじっと見ていたんですけど、あるときみんなで部落問題を自分たちの問題として真剣に考えていこうとする集団が、できつつあるなあという思いでいっぱいになりました。私自身、この問題に関わる切ない思い出がいくつもあります。部落問題を学習するとき、部落問題に関わって傷のある人は、苦しくつらいという思いからスタートしていると思います。私も、父親や母親、祖父、祖母の差別の中を生きてきた思いがわかったとき、本当に口惜しいつらい思いになった思い出があります。特に私の祖父はとても厳しい人です。その祖父が私の前でただの一度だけです。部落問題の話をしているときに、涙を私の前で初めて見せました。もう80歳になりますけど、私はもう生涯祖父の涙を見ることがないと思います。その涙はまさしく部落差別に関わる口惜しい思い出、いくら頑張ってもどうにもならなかったことを思い出し、その歯がゆさ口惜しさがこみ上げてきて、私の前で涙をこぼしました。差別の現実、今はなかなか見えにくくなっているけど、まだ解決していない厳しい現実があります。そのことをもっともっと勉強していくんです。この問題を勉強していくということは、部落の人間にとって苦しいです。自分自身の傷せせくられるようで、つらい気持ちになっていきます。みんなの友だちの一人が書いた文章にこんな一節があります。「先生、私は部落問題の勉強をしているときが一番つらい気持ちになっていきます」と記しています。同和地区に生まれた仲間の中には、こんな気持ちでいる仲間が何人かいると思います。できるならば、このことについていつまでもふたをしておいてほしい。このことは本当につらいんです、このつらいことは考えずにいたいんだ。そんな気持ちでいる人も少なくないと思います。でも、今も結婚の問題をはじめとする多くの差別がある以上、このまま放置できないんです。特に結婚に関わって、差別はいけないといっていた人が、結婚の問題だけは違うんだといって、見事に差別者となっていく、そんな悲しい事実を私はたくさん知っているんです。そして、今もその問題に関わって心を痛めています。口惜しい思いをしています。私はそんな口惜しい思いをバネとして、差別を許さない学習に自分のすべてをおつけていきます。4月からいろいろな資料を通して学習してきた。そして、昨日6時間目の学年全体からいろいろな意見が出た『私の目をみて!』の授業を振り返って、みんなの資料に寄せる思い、昨日みんなの腹の中にぐっと沸き起こったことをみんなに語ってほしいと思うんです。丸岡忠雄さんの詩『ふるさと』の話をしたことがあります、私のことを部落の人間であると知っている人と、この部落問題の話をしていくことは、とても話がしやすいんです。でも、私のことを部落の人間だと知らない人と部落問題のことに話題がいったとき、いつ私が部落の人間であるということを切り出していこうか、今も戸惑うことがときおりあります。ふるさと、自分の生まれたところを語っていくということは、部落の人間にとってつらいです。なかなか言えないです。資料にえがかれた勝子もそうですね。勝子の自分の出身地が言えない気持ちをみんなはどうとらえてくれたか、そのことについてみんなが思うことがあったら、最初に発表してく

ださい。

SN(女)勇気がたりなかったのかもしれませんが、でも、自分が部落出身であることを言うのに特別な勇気があるのは、まわりが差別しているからで、差別がなければ出身地を言うのに勇気なんていらぬはずだと思います。

T 2: 自分の生まれたところ、出身地を言うということはごくあたりまえに、自然に言えるものでなければならぬはずですね。勇気を出さなければ出身地が言えない、そのことがおかしいということですね。

MT(男)僕も、勝子さんが自分の気持ちや出身地が言えないのがおかしいのではなくて、言いたくても言えないくらい部落差別はきつくこわいものだと思います。いくら頑張っても差別はより厳しくエスカレートして、むやみに口に出すと、どんなつらい目に合うかもわからない、そのくらい差別がきつくて勇気があってもなかなか言えないんだと思います。

T 3: 今の意見についてどうでしょうか。

YY(女)自分の出身地を言えないのは、すごくつらいことだし、言わせぬ部落差別の厳しさを私は感じます。

T 4: 言えないのではなく言わせぬ厳しさ、またこの問題を学習したときに部落の人たちを悲しく切ない思いにさせていく。何ですかねえ、それは人の愛を引き裂いたり、幸せを奪ったりする差別が胸はって自分の生まれ育った、自分にとって大切な場所すら言えないようにしているんですね。

MS(女)私も勝子が自分の出身地を言えなかったのは、言おうとしてもまた言いたくても、言ってしまう職場で差別されるかもしれないという気持ちもあつただろうし、同じ中学校の仲間もいなくて、一人になったつらさもあつたからだと思います。

YK(女)「職場でどうたかかっていけば」と資料の最後のところで勝子さんが言っていたけど、私は勝子さんは勝子さんの思いを言っていかなければならぬと思います。

T 5: 言わなければ解決していかぬということ、それと言えないということが問題であるということ。あとどうですか。

MO(女)Kさんと同じで私は言うことによって、みんなわかつてくれると思います。

KK(男)僕もみんなに訴えていくことによってわかつてくれると思います。

SN(女)けど、私は愛子さんに勝子さんが言ったときに愛子さんはわかつてくれなくて、表面的に差別はないでしょうとごまかしたように、言ってもわからない人は多くいると思います。だから、なかなか言えるものではないと思います。

JK(男)言いにくいことだけど、わかつてもらうためにはまず言っていかなければならぬと思います。

KN(男)僕も出身地が言えないのが悪いのではなくて、言えないようにしているまわりの人たちが悪いんだと思います。

SH(男)勝子さんは言ったらいじめられる差別されるということを知っているからこそ、なかなか言えないんだと思います。

MM(女)私も、出身地を言ってしまったら、差別されるだから言えないんだと思います。

T 6: 言わないのではなくて言えない。差別があるから言えない。しかし、愛子さんとのやり取りの中で勝子は語った、必死に訴えた。この勝子の気持ちを考えてみたい。訴えた勝子についてみんなが思うことを発表してください。

MT(男)愛子は自分が差別していてもしていることに気づいていない。多くの人が差別に苦しんでいるのに、苦しんでいることすらわからない愛子に、勝子は腹が立ったんだと思います。そして、愛子に差別されている人は本当にこわいのか、差別している人は本当にこわくないのか、そのことをわかってほしいという気持ちが勝子を必死にしていっただんだと思います。

SN(女)T君と同じような意見なんだけど、愛子さんにちゃんと自分たちの本当のことをわかってほしいと思ったからこそ、必死に訴えたんだと思います。

MK(男)勝子は我慢できなくなったんだと思います。しかし、感情が高ぶっていても、出身地を言うのはすごく勇気がいることなんだと思います。

MT(女)勝子が本当のことを語ったとき、勝子は偉いなあと思いました。私だったらどんな状況になっても、差別されるのがこわくて出身地を隠していくと思います。勝子さんはすごいです。

YY(女)やっぱり勝子は、愛子さんに出身地を語るのにすごい勇気がいったと思います。それで、もし私が勝子さんの立場ならこれから差別を受けるとわかっていても、必死に自分のことをわかってもらおうと打ち明けたと思います。

NN(女)愛子さんに向かって勝子さんが訴えている姿に感動します。私にはできないと思います。でも勝子さんが頑張っているようすを見て、私も頑張らなければと思います。

MF(男)勝子さんは、愛子さんが言っていることは間違っているということを心からわかってほしかったと思います。

MN(女)私も、自分たち部落の人間を同じ人間とわかってほしいという気持ちから勝子さんは訴えたんだと思います。

TK(女)私も、本当のことをわかってほしいから必死に訴えたんだと思います。

T 7: 同じように「うん、うん」と相槌を打ったら隠せるんですね。でも隠さない、その行為について、その姿についてどう思いますか。

MM(男)たくさん勉強していたから、部落問題に対して相手にわからせる力があつたし、本当の勇気が育っていたから隠さず、本当の気持ちが言えたんだと思います。

T 8: たくさん勉強していたとはどういうことですか。

MM(男)やっぱり部落差別の厳しさや部落問題とは、どういうものであるかを中学時代に山嵐学級の仲間と、自分の生き方としてしっかり勉強していたということです。

T 9: たくさん勉強していたから、自分をごまかすことなく言えたというM君の意見についてどうですか。

SN(女)やっぱり、初め出身地が言えなかったのは、勉強していても中学時代の勉強があまり役に立っていなかったと思います。だけど、愛子さんがあまりにもひどいことを言うので、段々と腹が立って本当のことをわかってほしくていったんだと思います。

T 10: 腹が立った、その腹立ちとは何だろうか。

MM(女)部落のことで本当のことがわかっていないのに、部落の人を差別していくことにわき起ってきた怒りだだと思います。

T 11: 差別していく人を許せない。そのままにしておけないという怒りや腹立ち、それが勝子に勇気を与えていったということですか。他に意見ないですか。

KN(男)やっぱり、いつまでも自分の心の中に隠しては、本当にわかってもらえないし、何にもよくなっていかないということがわかっていったから、はっきり訴えていくことができたんだと思います。

HM(男)僕は勝子さんは、もうこれ以上自分みたいに差別される人をこの工場内でつくりたくないという思いがあったから、自分のことを語り訴えることができたんだと思います。

T12: 私自身こんな場面を経験したことが何度もあります。私を部落の人間と知らず、私の前でこんなことがよく言えるなあと思うくらい、部落の悪口を言う。そんな場面を教師になってからも何度か経験してきました。昨年もありました。あるお宅へ用事があったって行ったとき、偶然その家にきていた近所のおじさんと話をするようになりました。そのおじさん、ある話から私に突っかかってきました。私を部落の人間とは夢にも思わなかったんでしょ。こんなことを口にされました。「学校で同和教育やしいまわるけん、部落の人間がつけあがるんじゃ。今は差別は逆じゃ、わしらが差別されよんじゃ、部落の人間に問題がある、部落の人間が悪いんじゃ」そんな言葉が、私に向かって飛んできました。20分ぐらい静かに聞いていました。悲しくなって、やがて震えるくらい腹が立ってきました。腹が立って涙が出そうになりました。この資料と同じですね。私人間として部落問題解決に情熱を燃やす教師として、本物がどうか問われているそう思いました。静かに語っていきました。おじさん、それは違うよ、私は部落に生まれたけど、こう生きてきた。私の親は、私の家族は、私に頑張って生き抜いてくれという祈りようなさまざまな願いや思いを託して、私を育ててくれた。私の部落の多くの仲間が、今いろんな苦しみをかみしめながらも前向きに一生懸命生きている。私の胸の中にかみ上げてくるいろいろな話を、本当に穏やかに静かに、しかし、はっきりと語っていきました。そして、最後にこんな話をしました。部落の中にも悪いことをする人がおるかもしれん、でも、部落でない人の中にも悪いことをする人がおるでしょう。それなのに、部落の人間が一人悪いことをしたら、部落全体が悪いときめつけていく。でも、部落でない人が悪いことをしたときは、その家だけのことであり、その人、個人のこととして納得していく。一人の部落の人間の問題を部落すべての問題としてすり替えていき差別している。そのことをわかってほしいんです。そんないろいろな話を2時間程続け、わかってくれたかなあ、どうかなあという思いの中で、その日は別れました。1週間ぐらいしてから連絡がありました。その家の人を通じて、またいつか逢いたい、話がしたいと連絡がありました。2ヶ月ぐらいたって、同じ家で逢いました。初めて会ったときとは別人のように穏やかな顔で私に挨拶をしてくれました。その日、しみじみとお前と話ができてよかったということを語ってくれました。そんな場面がこれからのみんなの人生の中で数限りなくありますよ。私は部落に生まれた、私は部落に生まれなかった、立場は違うかもわからないけど、相槌を打って流されていくか、その場の雰囲気や壊れようがしつかりと間違いを指摘していくことができるか。そんな人間としての値打ちが問われる場面がいっぱいあると思うんです。学校もそうですよ。だれかを痛めつけて仲間外れにして、仲良しになっていくことができる、そんな集団があったら、それはおかしいですよ。おかしいことがおかしいといえる勇気がいると思うんです。勝子の勇気をもろうて、私たちは生きていかなあかんと思うんです。そして、勝子は愛子とのやり取りの中で「私の目をみて」と言った。その眼には涙です。涙を流しながらも「私の目を見て」と言った勝子の勇気、「私の目をみて」という言葉からみんなはどんなことを思いますか。

SN(女)目の前のこと、部落問題に目をそらさないで真剣に考えてほしいという思いが、「私の目をみて」という言葉になったんだと思います。

YO(女)どれだけ自分が真剣に言っているのか、わかってほしかったんだと思います。

NI(女)本当に差別がないのか、どうかということを知ってほしかったんだと思います。

YT(女)差別の悲しみをわかってほしかったと思います。

MT(男)「私の目をみて」という言葉には、私もあなたと同じ心を持っている、それなのにどうして差別されなければならないのかという気持ちが込められていると思います。

SI(男)勝子は愛子に自分の本当の気持ちをわかってほしい。それが「私の目をみて!」という言葉になったんだと思います。

MM(男)T君が言ったように差別される人間の口惜しさや悲しさを心からわかってほしいという気持ちがあったと思います。

AK(男)勝子自身も絶対差別から逃げないという決意が、この「私の目をみて!」という言葉に込められていて、これからは差別とたたかい続けていくと訴えていると思います。

KN(男)僕も竹谷君の意見に依っていて、部落の人を差別しているのは、絶対に間違っているということをお心からわかってほしかったんだと思います。

JN(女)愛子に差別する心をなくしてほしいという願いが、「私の目をみて!本当のことをわかって」という言葉になったんだと思います。

T13:でも、勝子が生きていく職場というのは厳しいですね。昨日の授業の中で、C組のIさんが話をしたこと、Sさんが後半語ってくれたこと。『私の目をみて!』を今回勉強したこと、部落問題を学ぶということは何なんだろうか。どんな意味があるのだろうか。この中にも、「先生、この勉強するほんまにつらい」という人がおると思います。また、「この勉強は必死になってやらないかん」という気持ちになっている人もいます。部落問題を学ぶということは何なんだろうか。どんな意味があるのだろうか。重苦しいつらい気持ち、ほっといたら、そっとしといたら自然となくなっていくんでないんという気持ち。私にもそんな気持ちがかつてなかったとは言えません。でも、この学習を深めていく中で、それは違うんだ、わが生命の営みとして、自分の生きていく使命として、この問題に必死に取り組んでいくんだという思いが生まれてきて、私は毎年、年が変わるときに新しい年の手帳に一つの詩を書き続けているんです。その詩と出会ってもう6年ぐらになります。詩を書き込んだ手帳のその部分は、今までたった一人しか見せていません。その詩を見せたのは、私の女房だけです。私は彼女と結婚するとき大変苦労しました。私も苦労したけど、私以上に悩み苦しき、さまざまな思いをかみしめていたのが、私の女房だったと思います。私は、結婚を決意した最初の頃、彼女の苦しみがわかりませんでした。彼女は私が部落の人間であるということで、彼女を取り巻く人々に私との交際を厳しく反対されていたんです。私自身も、二人で結婚を決めた頃は、多くの仲間が集まってもらって祝福を受ける結婚なんてできないだろうとあきらめていたんです。私のそんな思い以上に女房は、そんな思いが強かったと思います。彼女が、私との交際を反対されていて苦しんでいた頃、彼女は、私自身の口から私自身のこと、私が部落の人間としてどのように生きていこうとしているのかということ、はっきり聞いて共に頑張っていきたいという思いが強かったんでしょう。確か結婚する1年前だったと思います。彼女は何かを言いたそうなのに言えない、本当につらそうな表情で急に黙り込んでしまいました。私がこのことかと、私が部落の人間であることを話し出すと、彼女は静かにうなずきました。そのとき、私はその手帳を出して、その詩を見せました。私はこれを支えとしてこの問題の解決のために頑張って生きていく。そんな話をしました。その手帳のその詩を見せたのは、そのとき一回きり、彼女一人きりです。その詩は、『よろこび』という西口敏夫という先生が書かれた詩です。

部落で生まれ、
部落で育ち、
部落でくらし、
運動と教育にいのちをかけて六十年。

或るときは、烈火の叫びとなり、
或るときは、草にすたく虫の声となり、
或るときは、鋭く差別の事実に取り、
或るときは、静かに差別の矛盾を訴えた。

このみちは、きびしい荊の道なれど、
この道はわが生涯のつとめなり。

ゆくさきは、幾多迫害ありとて、
この営みは、わが終生の、運命なり。

しかして、この営みは、
わが生命の生きがいにして、
わが生命のよろこびなり。

T14：部落差別を解消していく営み、それは人間として生きる喜びなんだという、私の生涯の宝物である詩を見せた思い出があります。この問題を勉強していくということは、どんな意味があるのか、たとえば学習会がある。どうして学習会があるんだろうと悩んでいる人もいます。この問題に関わって、今みんなが思っていることを今日の授業の最後に発表してほしいと思うんです。

YK(女)今、先生が学習会について話を出してくれたけど、私は学習会についておかしいと思っています。小学校のとき、友だちについて学習会にいったとき、私はあのときは一緒に勉強しようという気持ちでついていったのに、Yちゃんはこんでいいけんといって、先生に帰されたことがあったので、私はおかしいと思っています。

T15：学習会は、先生が中学2年のときに県下の同和地区のある学校のほとんどで実施されるようになったんです。学習会の大きな願いの一つは、部落の子どもにしっかりと部落問題の勉強をさせていくということなんです。私も、中学当時、学習会場で部落はなぜつくれられ、どのように差別が残されたかということを知り、自分は部落に生まれた人間としてどのように生きていくかということを知り、自分は部落の仲間と共に語り合った思い出があります。学習会は差別の中を生きていかなければならない部落の子どもたちに、部落の人間として、どのように生きていくかという自覚を持たせ、部落の仲間がつながり結び付いていく、そして、共に励まし合いながら生きていくという話し合いをする場であると思うんです。それともう一つの願いは部落の生徒に学力をつけるということです。学習会ができる前より、社会には部落差別が厳しく存在し、部落の進学率は、徳島県全体の進学率と比較して、20～30%ひらいていたんです。そして、今もまだ8～10%のひらきがあるんです。その差がなかなか縮まらない。それは差別がある

からなんです。そんな二つの願いを持って学習会が実施されています。部落の子どもたちが中心になって、部落問題を解決するために学習会があるということを知ってほしいんです。この学習会に関わって何か意見があったらお願いします。

YY(女)私自身、小学校の低学年の頃から学習会に行っていたんだけど、自分自身が部落に生まれたということを知らんかって、しんだいなあとというだらけた気持ちで行っていたとき、あるとき先生が「あんたら、どうして学習会にきよるかわかるで?」と言われたので、私は軽い気持ちで「そんなん知らん」と答えたら、先生が「あんたらは部落に生まれたから学習会に行っているんでよ」というふうに言われたんです。でも、そのときは部落というのは、どんなものかわらんかったの、そのままなんとなくしかわからない状態だったんだけど、5年生のときに、また先生から「部落に生まれたことを誇りに思え」と言われたんです。でも、どうして誇りに思わないかのか疑問に思いよって考えてきよったんだけど、最近思うようになったことは「部落以外の人は部落差別というのは受けたことがないと思うんです。部落差別を受けた部落の人たちしか、部落差別を受ける気持ちというのはわからんと思うから、その気持ちを自分のまわりのいろんな差別に対してぶつけて改善していかなあかん」という気持ちが自分にわいてきて、ほんま「ああ、学習会はずごい大事なもののなんやなあと思うて、それから学習会という自分にとって大切な時間をおろそかにしてはいかなあ」と思うようになりました。

T16: 今のYさんの意見について思うことを発表してくれる。

SN(女)私は前まで学習会は、ないほうがいいと思っていました。私自身も差別意識があつて学習会に行っている子を見たら「ああ、この子も部落の子やなあ」と思って、学習会は部落の子と部落外の子を分けているようであまりいいことはないと思ってたけど、Yさんの話を聞いたら、学習会は差別をなくすために近道というか、とても大切なところなんだと思えてきました。

T17: 学習会が部落と部落外を分けていくのではなくて、学習会が学校の部落問題学習の核となって、より部落と部落外の思いと思いをつなぐ、連携を深めていく、部落差別をみんなでなくしていくんだという同和教育推進の中心に学習会が成立していかなければならないと思うんです。他にどうですか。

JK(男)差別している人は、自分が部落に生まれたらどんな思いでいるかということを考えて、差別を受けている人のつらさを一つでもわかったら差別する心はなくなっていくと思います。

MS(女)私も学習会は、いろんな先生が学習会にいて差別に立ち向かって生きていくように、勉強していかんかと進めてくれるから、ほんとは心の中で行かないいかんと思うけど、やっぱりどこかに差別があつてなかなか行くことができません。

MM(女)私も、学習会に対しておかしいなあと思っています。小学校のときに私が学習会の会場に行ったら、先生に帰りなさいと言われて、どうしてきたらいいかのかなあと思っていたことがありました。でも、Yさんやみんなの話を聞いていると、今まで部落の子は自分とは違うんだという気持ちがどこかにあつて差別をしていたと思います。

T18: 私は昨日始まったと思います。昨日の6時間目に本当の同和教育が始まったと思うんです。本当の意味で、わが生命をかける教育は昨日始まった。決して許さないという、差別しないと言うだけではない、差別できないという思いをすべての人間の生き方にしていく、そのためにこのことを徹底的に学んでいく。何が間違っているのかということ徹底的にわからせていく力、わからせていく営み。今していることで涙が出そうになる。それは差別があるから、この

ことがこの思いが胸張って話していける学校や学級や、そしてそういう社会をつくっていく。そのためこの営みを続けていく。みんなは、私の大切な仲間なんです。何を求めていくか、もっともつとろんな話を続けていきたいし、みんなの思いをしっかりとまとめていきたいと思ひます。一生懸命に発表してくれたみんなにありがとうという気持ちでいっぱいです。私は絶対に負けない、生命をかけて生命終わるまでこの教育に頑張り続けます。終わります。

※ ※ ※

『この授業は私が大きな第一歩を踏み出すきっかけとなった授業である。この授業は生涯忘れることはない。生徒たちの授業後の感想を掲載しておきたい。』

『先生、今日の4時間目、とても感動しました。特に先生の結婚の話のとき、涙が出ました。顔が熱くなって何もしゃべれなかった。先生はえらいと思う。

おじいちゃんと、話をしました。K地区のHという地域が部落だそうです。じつは、私の住所はK字Hです。私はびっくりしました。でも、私の家は、道路そいにあります。部落は私の家のうらからだそうです。はじめ、いやだっ！って思っていました。おじいちゃんから、私の家は部落には入ってないって聞いたときは、ものすごくホッとした。それでハッとした。これも差別ちがうかって、先生の話の聞いていると、涙がでて、腹が立ってくるのに、自分のこととなると、いやだっと思うんです。ものすごく、つごうのいい心だなあって思いました。

Yさんのふるえながら、言っているのを聞いて、差別するのが、差別しているのが、バカらしくなってきました。差別のむごさも少しずつわかってきました。

世の中にまだ差別があるのを気づかないのは、その人自身にある、差別意識に気づいていないからだと思ひます。』

『今日、はじめて部落問題について友だちと話し合いました。友だちには内面のことも話し合える友だちと、表面だけで話す友だちが私にはいます。今日、部落問題について話をしたOさんは私の内面も話し合える大事な友だちの一人です。Oさんも、今日の授業が終わったとき、涙を浮かべていました。私と同じことを感じていたのです。うれしかったような安心したような気持ちでした。本当の仲間だと深く深く思いました。この人の言葉がジーンときたとか、いろいろ話をしました、先生の言う通り、そんな心の奥底にあることを話を話し合うことができこそ、本当の友だちだなあと感じました。Oさんといるととても安心します。いい友だちです。』

『今日の授業は本当によかったです。今日のはじめて心から部落問題について考えたような気がします。先生は、D組の公開授業から、本当の部落問題の学習が始まったと言っていました。私は今日の授業でそう思いました。はっきり言って今までとは違うものを感じました。本当に今、書いている文章は口先でなく、正直な私の本当の気持ちです。私は同じ学年で、部落問題で悩んでいる子がいるとは、今まで知りませんでした。部落だと自分で気づいても平気だと思ひました。私は部落差別を甘くみすぎていたんです。Yさんの話、先生の結婚の話、詩の話、この三つの話を聞いているとき、不思議と涙が出ました。その涙が感動の涙なのか、同情の涙なのか、悲しみの涙なのか、他の涙なのか、私にはわかりません。ただ目に涙が浮かぶばかりでした。学習会のことを言っていたとき、なぜ部落の人が勉強しなければならないのか不思議に思いました。勉強しなければならないのは、差別者の方だと思ひます。発表しようと思ひましたけど、勝子さんのような勇気がなく、とても残念でした。本当に今日はとてもいい授業でした。』

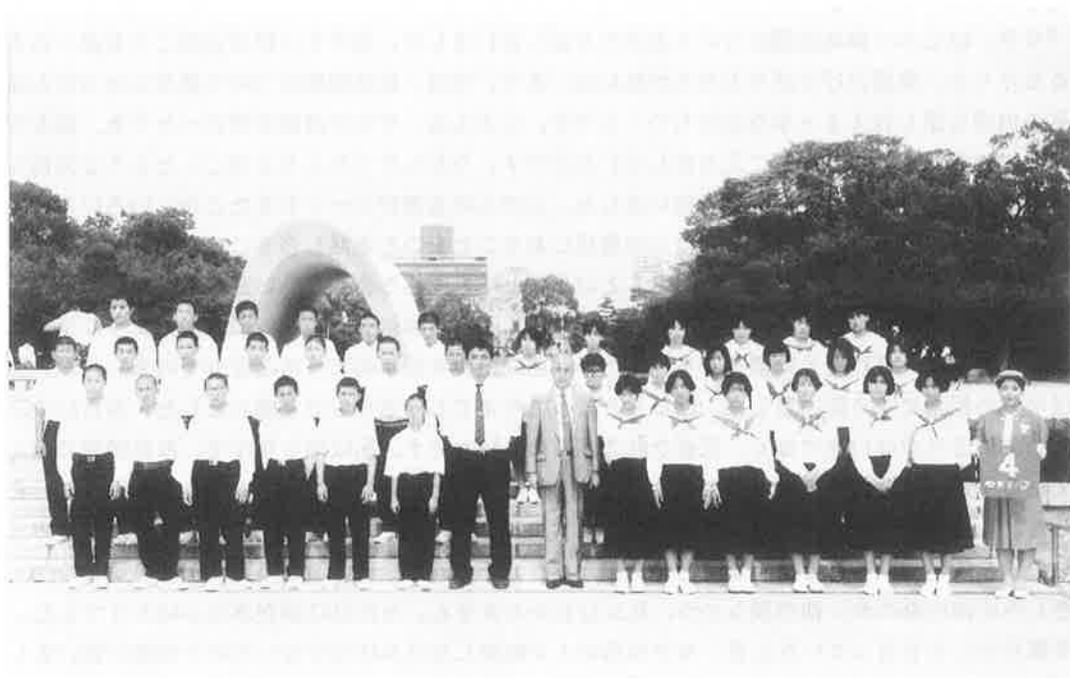
『今日の授業、胸がいっぱいになって涙が出てきた。今までにない悲しさ、腹立ちがこみ上げてきました。こんなに真剣になれた授業は、本当にはじめてでした。

先生の話にとても心をうたれた。奥さんとの結婚前の話を笑顔で話していた先生。でも、心の中は少しつらかったと思います。そんなことを考えながら聞いていると、顔が熱くなって、涙が出てきました。Yさんの話も、同じような気持ちになりました。あのときYさん、とても勇気がいったと思います。そして、つらかっただろうと思います。かすかに声がふるえていました。話を聞いていると、なんだか身体がばらばらになったような心地がしました。差別していた心がこわくなりました。

「生命をかけて、生涯、この問題に取り組んでいく」と先生が言った言葉がまだ頭の中に残っています。私も思いました。自分の生まれた家の住所を言うだけでも、たくさんの勇気がいる。というような必要のない勇気をもたなければならない人たちをふやしたくありません。

Iさんと約束しました。「差別なんか絶対にしない」って。約束したからには守りたいと思います。』

『私の最後の意見、長ったらしくなったけど、たまっていたものが全部出せてスッキリしたような気がします。やっぱり授業のとき言ったけど、部落差別っていうのは、部落に生まれた私、学習会に行っている私からなくさなければいけないと思います。だから、すごく勇気がいることやけど、私から頑張って差別に立ち向かっていこうと思います。』



1990年度板野中学校 2年B組 修学旅行 ～広島平和公園～